

## 相馬中村藩への南砺地方農民の移住について

浅間山の噴火などに起因する天明の凶作は、北陸地方ではさほど大きな被害が出なかったのですが、東北地方の被害は甚大でした。

相馬中村藩（藩域は現在の南相馬市・相馬市など）では、天明3年(1783)の飢饉で全人口の9パーセントにあたる4,417人が飢餓と病気で亡くなり、1,843人が失踪、さらに翌4年も飢餓と疫病で6月までに8,500人が亡くなるという惨状でした（注1）。そのため、人手不足による農地の荒廃が進み、30年を経た文化年間に至っても回復をみていなかったのです。

そこで、中村藩は文化8年(1811)ころから北陸を中心として領外に労働力を求め、積極的に移民を導入する政策をとりました。浄土真宗門徒が大多数を占める北陸では、真宗の教えによって間引き（注2）を厳禁していたこともあり、人口が増大して土地が不足するという、東北諸藩とは全く逆の現象下にあったのです。

この結果、文化10年(1813)から弘化2年(1845)までの約30年間で、北陸などの他領から8,943人、戸数にして1,974軒が移住し、荒地復旧を中心にして16,682石の水田と14,684石の畑地、合計3万石余りの土地が開発されたといえます。相馬中村藩の表高が6万石、実高でも9万7千石であったことを考えると、いかに移民の努力が復興に大きな役割を果たしたかが分かります。移民の導入は弘化2年以降も継続されたので、最終的には1万人前後が入植したと考えられます。

これらの地域では、移民の心の拠り所として真宗寺院を新たに建立した例もあります。例えば二日町村（現南砺市二日町：福野地域）の普願寺は、住職の兄弟二人を相馬藩に送り、正西寺・正福寺の二か寺を建立して住職に就かせています。このことから、現南砺市域から多数の移民があったことがうかがえますが、実際に移民の出身地を特定できる史料は乏しく、文化12年～天保4年及び天保11年の記録から83組413人が判明するのみです。これらのうち、現南砺市からの移住者は47組231人が確認できます。

表 相馬中村藩移民の出身地域別内訳（注3）

県名	現市町村名	地域	家族数	人数	旧村名
富山県	南砺市	福野	18	95	前田・苗島・下吉江・石田・院林・八塚 田尻・福野
		井波	4	21	井波・山見・松林
		城端	4	12	蓑谷・是安
		福光	21	103	神成・利波河・岩木・山本・在房・八幡・ 荒木・坂本・湯谷・開発・刀利・小山・西勝寺
		計	47	231	
	砺波・小矢部市		12	71	秋元・清水・頼成・安川・庄金剛・鴨島ほか
	その他・不明		8	40	射水・新川・婦負郡
	計		67	342	
その他			17	71	越後・加賀・陸奥国ほか
合計			84	413	

注1 実際の被害はこの10倍前後との説もあります。

2 間引き（口減らしのため、新生児を殺すこと）

3 判明する分のみの記載であり、全体を表すものではない。

参考文献：千秋謙治「砺波農民の相馬中村藩への移民」2009『砺波散村地域研究所紀要第26号』